

	<h1>留学のすすめ</h1> <p>SCE・Net 宮本 公明</p>	<p>O-19</p> <p>発行日 2016年8月25日</p>
---	--------------------------------------	---------------------------------------

留学のすすめ

言われ始めて久しいと思うが、最近の若い人の特徴として「下向き、内向き、後向き」という言葉がある。長らく続いた低成長社会の影響なのかも知れないが、私達のように高度経済成長の恩恵に浴した世代から見ると、将来が心配な現象である。

筆者の前職の富士フイルムがアメリカ・サウスカロライナ州に刷版材料、磁気記録材料、感光材料の生産ラインを建設した 90年代から 2000年の時代にその場所に集まった団塊の世代の多くは、日本製のテレビドラマが少なかったころのアメリカのホームドラマを見て、その豊かさにあこがれを感じた世代でもあった。

それから数十年を経て、その地に立って見るとアメリカに来る日本の若者の少なさと、中国、韓国の若者の多さに驚かされた。筆者は州立クレムソン大学化学工学科と州立サウスカロライナ大学化学工学科の支援者会議に出席することもあり、学科事務室に時々出入りしていた。当時は、大学院生の写真入り名札が事務室入口に掲げられていて、それを見ると、どちらの大学も 3割強が中国人、1割強が韓国人でインド人も入れると半数がアジア人であった。両大学とも、日本では有名ではない大学であるが、委託研究を中国人留学生や韓国人留学生に依頼したところ、富士フイルム本社研究部門ではお目にかかれないレベルの優秀さであった。さらに驚いたのは、どちらの大学の化学工学科にも日本人が一人もいないことだった。その上、大学の研究視察にサウスカロライナを訪れた日本の研究者にアメリカに留学しないかと誘ったところ、「この程度の進歩性ならわざわざ海外に出る必要はないと思う」とのガッカリな返事であった。確かに、研究目標が同じなら、あとは研究者/指導者の資質と研究のための環境の問題であって日本でも調達できるであろうと思われる。しかしながら、筆者が 1982年に留学したミネソタ大学化学工学材料科学科では、多国籍の院生たちが教授も含めて議論を交わすなかで、今までになかった計算手法を考案し、それをソフトウェアベンダーに提供することで広めるといった当時の日本では考えられないことが行われていた。さらに、2000年以後のクレムソン大学では、学内インキュベーションセンターが機能していた。このような、研究環境の差異まで考えると、「海外に出ない」理由は根拠が揺らいでいると思われる。

以下に若い時に留学することの効能についての私見を、自身の経験をもとにいくつか紹

介したい。

一番目は、産学の関係が成熟していて、教授の多くが民間企業での実務経験を持っていることである。このため、いいアイデアを思い付いた研究者が大学で研究し、それを学内のインキュベーションの仕組みを使って商品の形にして卒業するというモデルができている。日本では、そもそも研究者の産学交流がそれほど活発ではない（もちろん、民間企業の研究者と協業する研究センターを売りにしている大学は増えてはいるが）大学がベンチャーを育てるという仕組みはまだ不十分である。この点が重要なのは、このような仕組みを目の当たりにすると、このような運営そのものが上手にできることである。今はグローバル化が叫ばれている時代であるが、アメリカの隅々でもこのような仕組みを目の当たりにしたアジアからの留学生たちが帰国して母国で同じような仕組みを作ったとしたら、日本の先端技術の地盤沈下は避けられないと思えてならない。

二番目は、アメリカのような多国籍の環境にいと、周りは全て自分とは異なる考えかもしれないと自然に思えることである。筆者は8年間、現地工場の運用に携わってきたが、部下の日本人で留学経験のある者となない者ではアメリカ人との協働に差がある事例を何度か経験した。もちろんコンフリクトを起こす日本人がいつも悪いとは言えないが、現地の人に何か指示をしたり指導をしたりするとき、相手の心理的状态はどうであるかまで理解していないと、円滑な運営にはならないことは明らかである。

三番目は、自分から発信することがあたり前になることである。筆者は、駐在期間中、家から100km離れた大きな町の日本人補習校（土曜教室）で中学の数学を教えていた。そこに集まってくる子供たちは、平日は近隣の現地校で学習し、日本に帰国したときに困らないよう日本のカリキュラムに応じた内容も学んでおきたい子供たちである。驚いたのは、私が生徒達に何か質問をすると競って手をあげることである。日本で我が子の授業参観は何度も経験したがこのようなことは決してお目にかかることがなかった。彼らは、日々の学校生活のなかで、アメリカ人からこのような態度を学び取っていたのだと思う。それにつけて思い出されるのは、留学時代に1年間の研究成果を学会に出すように言われた時の指導教授の言葉である。「人の考えは言葉を通してしか伝えられないし、意味をなさない」というのは、種々の人種が入り混じっている社会では必然的な結論と思える。

このように考えると、たとえ成熟した社会人であっても、このような国で暮らし、社会生活を送ることで身に着けられるスキルや姿勢は多いのではないと思われる。

では、どんな人が留学に向いているのだろうか。筆者の留学時代に見聞きした事例や、駐在時代に接した日本人の子供達を見ていると、向き不向きがあることが分かる。最も適している人柄は、社交的あるいは好奇心旺盛な人である。このような人は、例え当初は言葉の問題で苦労したとしても、現地の友人と話すうちに半年から一年でことばの壁を克服

してしまうので、そのあと現地の社会に溶け込んでいける。そうすれば自ずと先に述べたような貴重な体験を自分のものにしていける。逆に、人見知りの激しい人は、入口で躓いてしまうのでなかなか先に進めない。ただし、留学の目的が明確であるならその躓きを克服することも可能であるので、性格だけで適不適を論じるのは危ないこともある。要は、本人がどれだけ自分に動機づけできるかということかもしれない。

さらに、年齢の点でも適当な範囲はあると考えられる。先に紹介した日本人補習校に通う子供達（小学1年～中学3年）は人格を形成する時期でもあるので、世界を相手にする人を育成する上では適している。また、ある雑誌に掲載された言語学者の研究では、LとRの発音を正確に聞き分けられるようになるためには、13歳までにこの2音に区別があるような環境で習得することが重要であるとされている。筆者のように30歳を過ぎてからは手遅れである。しかしながら、その日本人補習校の校長で、州立大学の日本語学科で教鞭をとる先生の話では、あまりに早く他国の環境に置かれると、日本人としてのアイデンティティーを無くしてしまうので帰国してから問題を生じるとのことである。結局、小学校高学年以上ということになると思う。片や、大学の留学では、単位をとるためにながりの徹夜もいとわない覚悟が必要になる。大学のなかでは、入学が簡単なだけにドロップアウトも時に見受けられる。企業から派遣された研究生では、単位取得に追われない代わり、研究の目標の妥当性が重要になってくる。そのため、職場の中で帰国時に自分はなにを求められ、研究成果がどのように活用できるかを思い描けるよう、入社5年程度以上の経験が必要と思われる。

以上、独断に満ちた留学のすすめを書かせていただいた。この文章をお読みの方は、今から海外生活を始めるなどもってのほかであろうが、子供や孫あるいは知人の背中を押すことはできるのではないかと想像する。もし、そのような機会のありそうな人を見かけたら、是非とも背中を押してあげていただきたくお願いする次第である。